

唯識学派における「二乗」の觀念について

吉 村 誠

一、序言

唐代初期の長安では、玄奘の門下とその周辺で「二乗」の解釈をめぐる論争が繰り広げられた。小稿では、この論争の経緯に立ち入る前段階として、論争の根拠となつた瑜伽行派の文献（漢訳）に説かれる「二乗」の解釈と、その発展過程について考察するものである。唐初の唯識学派では「二乗」の觀念を『解深密經』・『顯揚聖教論』（以下『顯揚論』）・『大乘莊嚴經論』（同『莊嚴論』）・『攝大乘論』（同『攝論』）に基づいて理解していた。これらの成立順序には議論があるが、円測はこの順序で一乗思想が発展したものと考えていたようであり（『解深密經疏』、卅統一―三四、三九二右上一左下）、それは著者に関する伝承や、解釈の内容・項目数から考えても妥当なものと思われる。そこで以下、この順序に従つて考察をすめてゆくことにしたい。⁽²⁾

二、『解深密經』の一乗思想

『解深密經』の「二乗」についての記述は、無自性相品と地波羅蜜多品に説かれている。いずれも、乗は一つであるという教えはいかなる意図から説かれたのか、という菩薩の問いに対する仏の答えである。

一切声聞独覺菩薩、①皆共此「妙清淨道」、②皆同此「究竟清淨」、更無第二。我依此故、密意說言唯一乗、非於一切有情界中、無有種種有情種性。

如我於彼声聞乘中、宣說種種諸法自性、所謂五蘊或内六處或外六處、如是等類於大乘中、即說彼法③同「法界同一理趣」。故我不說乘差別性。

前者は、①「妙清淨道」と②「究竟清淨」が諸乘に等しいから「二乗」が説かれたというものである。直前には「由此道此行迹故、証得無上安隱涅槃」とあることから、①と②は〈行道〉と〈証果〉の同一を述べていると理解されよう。た

だし、「有情界」すなわち修行者の立場からすれば種性の差別があることもあわせ説かれている。

ところで、「此道此行故」は前文とのつながりから、具体的には三無性説を指していることが分かる。そうすると、《行道》の同一の背後には、諸法実相という《真理》の同一が考えられていることになる。実際、隋訳では「依此道依此法」となっている。それが唐訳に至って「由此道此行迹」となったということは、その間の一乗思想の展開において、証される《真理》の同一よりも、それを証すること、すなわち《行道》の同一という意味のほうが強められたことを示唆している。

さて後者は、諸法の自性が③「同一法界同一理趣」として説かれたということを「一乗」の意味としている。「法界」と「理趣」の二つの同一をいうように見えるが、隋訳では「法界一味」、チベット訳では「唯一の理法なる法界」という意味であるといい、いずれも二つに区別されていない。文脈から考えても、諸法の自性は声聞乗であれ大乗であれ同じく《真理》として説かれた、という意味であろう。したがって、③も基本的には諸法実相という《真理》の同一を述べるものである。ただし、瑜伽行派の「法界」に関する思想の発達によって、次節の①のような意味の変化が生じたようである。

三、「顕揚聖教論」の六因

『顕揚論』撰勝決択品に説かれる「六因」は諸仏が「一乗」を説いた六つの理由を説明するものである。

一即彼①諸法約無差別相説故。二約②無分別行相説故。三約③衆生無我及法無我平等故。四④解脫平等故。…中略…五善能⑤變化住故。六行⑥究竟故。

これだけでは意味が不明瞭なものもあるが、ほとんどの項目が「莊嚴論」と『撰論』に引き継がれているので、それらの釈を参照しながら内容を検討してゆきたい。

①は「諸法」の実相の無差別をいう。これは、『解深密經』の諸法実相という《真理》の同一に近い解釈である。ところが、『莊嚴論』と『撰論』では「諸法」ではなく「法」となっている。釈によると、前者は「法界」、後者は「真如」の語で言い換えられ、どちらにも「所趣」が同一であると説明されている。『莊嚴論』と『撰論』の「法」は、諸乗の帰一するところ、という意味が強くなっているのである。³⁾

②の「無分別行相」は分別のない心のはたらき、所謂平等性智をいうものである。これは、自己と他者の平等を体现することであり、以下に見られる《行道》の同一の基礎となる観念である。

③は「衆生無我」と「法無我」の平等をいう。人法二無我

という（真理）は諸乘に等しいという意味である。ところが、『莊嚴論』や『撰論積』では単に「無我」となっており、あらゆる修行者は無我なるものであるという点で差別はないと説明している。

④は「解脱」の平等をいう。これは（証果）の同一をいうものであり、『莊嚴論』や『撰論』にも引き継がれている。

⑤の「変化」は、『莊嚴論』や『撰論積』の説明によれば、仏が無量の過去世において声聞となり涅槃を得たことをいう。仏が声聞に化したのは、その因縁を聞いた声聞に涅槃を得ようという意欲を起こさせるためであったという。そうすると、「変化」とは、修行者の（行道）が仏のそれと同一であることを示す解釈と言えるであろう。

⑥の「究竟」は解釈が安定していない。『莊嚴論』は、「仏体」に至れば他に趣くところがないので「一乗」であると説明している。これは、『解深密經』と同様、「究竟」を（証果）の意味で解釈したものであろう。しかし『撰論積』は、最上無比の乗なので「一乗」であると説明している。これは、（証果）の同一性ではなく、むしろ（行道）の絶対性を強調する特異な解釈である。

四、『大乘莊嚴經論』の八意

『莊嚴論』は述求品において、諸仏が「一乗」を説いた八

つの意図を説明している。

①法②無我③解脱 同故④性別故

⑤⑥得二意⑦変化 ⑧究竟説一乗

このうち、①②③⑦⑧の項目は『顯揚論』の①③④⑤⑥を引き継いだものであり、その内容の違いについては前述した。ここでは、新たに設けられた④「性」と⑤⑥「得二意」について検討することにした。

④の「性」とは、諸乗の種性に区別があるから「一乗」が説かれた、というものである。『解深密經』や『顯揚論』では三乗の同一が強調されていたが、ここに至り、区別があるからこそ一乗が説かれたという逆説的な解釈がなされるようになった。その意味するところは、釈に「不定三乗性人引入大乘」とあるように、三乗の区別にとらわれて未だ決定していない修行者がおり、彼らを大乘に誘引するために「二乗」が説かれた、というものである。『撰論積』でも、これが不定種性の成仏を意図した項目であることが明言されている。この項目の新設が瑜伽行派の「一乗思想」にとっていかに重要であったかは、後掲の偈に明らかである。

次に⑤⑥の「得二意」は、仏と衆生が同一であるとみる両者の意志をいうものである。⑤は釈に「諸仏得同自意故」とあり、仏が衆生を自分と同じであると思うことである。もし仏と衆生が同じならば、衆生も仏と同様に成仏できるはずで

あるから、仏は「一乗」を説いて衆生の成仏を促すのであるという。これは『撰論釈』も同趣旨である。⑥は釈に「声聞得作仏意故」とあり、「一乗」の教説を聴いて自らを仏と同じであると思ひ、成仏を目指す衆生の意志をいうものである。いまの声聞も過去世において悟りを得るための修行をしており、その時には確かに仏の種性にあるという思いを抱いていた。過去世の行為は相続されているから、いまの声聞も「一乗」の教説を聴いて成仏の意欲を起こすのであるという。

ここで注目すべきは、声聞が自らに成仏の意志があると知るのには「仏加」や「勝摂」によるという点である。つまり、成仏への意志は、諸仏のはたらきがあつて初めて知らしめられるというのである。ここから、⑤と⑥が不離の關係にあり、⑥が⑤に基礎づけられていることが理解される。仏は衆生への思いから「一乗」を説き、衆生はそれを聴いて作仏への意志が促されるのである。これは、諸乗の同一よりも、仏と衆生の同一をいうものであると言えよう。仏と衆生の「行道」の同一については、既に「變化」の解釈に現れているが、「變化」が仏の前世譚を下敷にしているのに対し、「二意」は『法華經』を意識して作られた解釈であると言えよう。そのことは、『撰論釈』で⑥が『法華經』の授記を例に説明されることから窺える。

しかし、「一乗」の教説を聴いて成仏を志向したとしても、

唯識学派における「二乗」の觀念について（吉村）

未だ成仏していない以上、退転もありうる三乗不定の立場であることに変わりはない。『莊嚴論』は「如是處處經中、以此八意仏説一乗、而亦不無三乗」という言葉で八意を総括し、『解深密經』と同様、あくまで「一乗」が説かれても三乗の区別はあるという立場を堅持している。

五、『撰大乘論』の十義——結語にかえて——

それでは、これらの新しい「一乗」の解釈は、どのような問題意識から創案されたのであろうか。その答えは、『莊嚴論』の続く偈に示されている。

引撰諸声聞 撰住諸菩薩

於此二不定 諸仏説一乗

すなわち、三乗の区別がありながら「一乗」が説かれたのは、不定の声聞や菩薩のためであるという。釈によれば、いま声聞であつても（向上の可能性があり）声聞乘に決定していない修行者を大乘に誘引し、いま菩薩であつても（退転の可能性があり）菩薩乘に決定していない修行者を大乘に安住させるために、「一乗」が説かれたというのである。これは先の④の「性」と⑤⑥の「得二意」の解釈を敷衍・強調したものとと言えるであろう。

ここには、諸仏が修行者へ思いをよせて「一乗」を説き、それを聴いて成仏への意志を強くした修行者は、三乗不定な

から解脱への道をあゆむ、という一連の構図が見て取れる。『莊嚴論』は仏と衆生の同一を課題とし、修行者が三乗不定のまま一つの道をあゆむという〈行道〉の逆説的な関係を、仏から衆生、衆生から仏という連環において説明しようとしたのであろう。

この偈は、『撰論』の彼果智分で「二乗」が説かれた理由の筆頭に数えられ、『莊嚴論』の八意とあわせて十義を構成するに至った。

為①引撰一類 及②任持余乗

由不定大乘 諸仏説一乗

②法④無我⑤解脱 等故⑥性不同

⑦⑧得二意樂⑨化 ⑩究竟説一乗

『撰論』の十義のうち①②⑥⑦⑧⑨の六義までが、修行者を大乘に誘引するために「二乗」が説かれた、という解釈に関連するものである。

以上、瑜伽行派の文献にみられる「二乗」の解釈とその展開について概観した。『解深密經』や『顯揚論』の「二乗」の解釈は〈真理〉〈証果〉〈行道〉の同一を強調するものであった。それに対し、『莊嚴論』や『撰論』の解釈は、「一乗」と三乗の矛盾した関係について、不定種性の成仏という観点から解決を試みたものである。その過程において、「一乗」とは仏の立場から修行者に知らしめられ、修行者はそれを聴い

て成仏への意志を強くするが、成仏への過程においては未だ三乗不定の立場にある、という構図が形成されたものと思われる。「二乗」と三乗の矛盾に対し、優劣を決定せず、両者の整合性を追究するという思考は、瑜伽行派の一乗思想の特徴と言えるであろう。中国の唯識学派においても、当初は「二乗」の觀念をどのように理解していたが、真諦訳『撰論』の影響や五姓各別説への反発もあって、その解釈は十分に浸透しなかったようである。その経緯については別稿で論じる予定である。

1 勝呂信静。『初期唯識思想の研究』（一九八九年、春秋社）参照。

2 以下の叙述は次の資料に基づく。『解深密經』大正二六、六九五 a、七〇八 a。『顯揚論』大正三一、五八一 b。『莊嚴論』大正三一、六一五 b-c。『撰論』大正三一、三七七 c-三七八 a。『撰論釈』は世親釈を用い、真諦訳や無性釈との比較は省略する。

3 松本史朗「唯識派の一乗思想について——一乗思想の研究（Ⅱ）——」（『駒澤大学仏教学部論集』一三、一九八二年）参照。氏は『莊嚴論』の「法界の無差別性」を重視して唯識派の一乗思想の構造を示された。それは法界觀の考察には有効であるが、以下に述べるように、一乗思想の特徴を示すものとしては一面的なものと思われる。

〈キーワード〉 一乗、瑜伽行派、唯識学派、玄奘

（恵泉女学園大学非常勤講師）